

## 令和2年度女性活躍推進事業「パパママサミット2020」 “話し愛”&“関わり愛”で私たちの「新しい日常」を創る

新型コロナウイルス感染症対策のため、オンデマンド配信で開催されることになったパパママサミット2020。

今年は新型コロナウイルスの影響で在宅勤務やテレワークなど、日常が大きく変化しており、改めて夫婦がお互いの仕事と家事・育児の両立や関係性について見直し、自分たちらしい新しい日常を創るために、それぞれができることを具体的に考えました。

モデレーターの天野ひかりさんを中心に、パネリストの皆さんによる本音ベースでの活発な意見交換が行われました。

パネリスト一人目は、NHK・Eテレ『おかあさんといっしょ』第11代体操のお兄さんであり、一児のパパでもある小林よしひささん。二人目は、IT企業就業ののち、NPO法人でお仕事をされている中村一さん。兼業作家でもあり、3人のお子さんがいらっしゃるそうです。三人目は、食育インストラクターであり、3人のお子さんを育てる和田明日香さん。四人目は、労働・子育てジャーナリストであり、NPO法人代表も務める吉田大樹さん。10年間シングルファーザーとして3人のお子さんを育ててこられたそうです。

そしてモデレーターは、一児のママであり、NHK・Eテレ『すくすく子育て』という番組の司会もされていた天野ひかりさん。また、今回ビジュアルファシリテーターとして沼野友紀さんも参加され、パネリストの皆さんの似顔絵のほか、ディスカッションの様子をリアルタイムでグラフィックレコーディングとしてまとめてくださいました。

### ●「自粛期間の過ごし方」

【小林さん】

これまでテレビの収録など「直接会って」お仕事をされるが多かったという小林さん。感染症の影響で仕事が在宅やオンラインが中心になる中で、もうすぐ2歳になるお子さんがちょうど立ち上がって、歩いて、言葉の数が増えてくる時期だったそう。「その状況をしっかり目の当たりにできたというのは、今回のコロナ禍において、私の中でプラスになった一面があった」と前向きに捉えていらっしゃいました。

【和田さん】

和田さんは、感染症の影響で世の中が大変なことになっている分、家の中のことをしっかりやらねば、と張り切ってしまい、辛くなってしまった、というエピソードをお話されました。誰に頼まれたわけでもないのに「私が一人で家族の生活のお膳立てをしているみたいな気持ちになってしまった」そうです。

これに対してモデレーターの天野さんから、「多くのお母さんから、それと同じことを聞きました」というお話が。けれど、「自粛期間から3か月ほど経った頃の出版社や新聞社のアンケート

では、『家族が仲良くなりました』と答えた割合が7割を超えた」というエピソードをご紹介くださいました。

【吉田さん】

吉田さんは、ずっと家にいると、子供たちに「あれしろ」「これしろ」と指示をしたくなってしまふから、という理由で昼間はなるべく出かけるようにしているそうです。その間の洗濯や食事を子供たち自身でやるように促したことで、結果的に子供たちの家事力もアップすることに繋がったとプラスに考えているそうです。

天野さんからのご意見として、「ママが全部頑張ってしまうから、もしかしたら夫・パパがやらなくても済んでしまうのかもしれないですね」というお話があり、吉田さんは、「やっぱりママがいるとパパは頼ってしまうので」と前置きをされた上で、「(夫が)自分なりにやりくりしていく考え方を促していくような夫婦の関係を作れたらいいんじゃないかなと思いました」とお話をされていました。

【中村さん】

中村さんもリモートワークでのお仕事がメインとなり、在宅時間が長くなると同時に、子供たちも保育園や学校の休園休校で家にいる時間が多くなったそうです。中村さんのご家庭では、昼食は子供たちが自分でレシピを考え、買い物に行き、作ることを促した結果、料理に対するハードルが下がり、最近では朝食も自ら作るように変わってきたというお話をされていました。

和田さんからは、「それはもともとベースができていた気がする」という意見があがり、そこで、普段からの家事や家のルールについての「土台作り」の重要性について、ディスカッションが行われました。その後、リフレッシュタイムとしてよしお兄さんによる「焼売じゃんけん」の実演が行われ、パネリストの皆さんも楽しく盛り上がりました。

## ●「コロナ禍で気づいたこと」

続いて天野さんから、「命を守るための『触っちゃだめよ』『喋っちゃだめよ』といった言葉を、成長期の子供が『人と関わり合うことが危険なことだ』と認識して成長してしまったらとても怖いことだな」と感じたというお話があり、それぞれパネリストがこの時期に気づいたことのお話に。

【中村さん】

コロナ禍のため保育士さんがマスクをして顔が半分しか見えない状態でも、0歳児が先生たちの笑顔に反応をしている、というお話をしてくださった中村さん。「これまでにはなかった子供の育ち方なのかもしれない」と気づいたほか、学校行事の見直しなど、「前例主義で止まってしまっていた思考が、これを機に考えてみるきっかけになったのではないか」というご指摘をされていました。

【吉田さん】

高校のPTA 会長と小学校のPTA 会長を兼任されているという吉田さん。コロナ禍において会議の方法や仕組みも、Zoom やリモートを活用することなどしっかり見直すことで時間の制約が減り、これまで参加が難しかった人、たとえばパパも、無理なく参加できる制度が作れるのではないかと感じられたそうです。「働き方や仕事の面だけではなく、地域活動などの面でも見直すチャンスが来たのではないか」とお話されていました。

【小林さん】

在宅での工作中、「よしお兄さん」としてのテンションを家族に見られることが少し恥ずかしいという小林さん。その棲み分けが難しい一方で、子供と一緒に過ごす時間が増えたことで、「遊びの天才」である子供と遊ぶ時間が増え、仕事のネタにもつながったと喜んでいました。

【和田さん】

「学校でみんなが集まって勉強するといった、私たちにとっての当たり前が、子供たちの世代にとっては全然当たり前じゃなくなっていくんだなというのを目の当たりにした期間だった」とお話され、「子供たちならではの生き方を応援できるような立場でありたい」とおっしゃっていました。

パネリストの皆さんのディスカッションを受けて、天野さんは「これまでのパパたちは、ワークかライフ、どちらに重点を置いてバランスを取るか。ワークとライフが対立軸にあったと思う」と分析。その上で、「本来は『ワーク on ライフ』、仕事と生活が重なりあっているという考え方をすることによって、仕事も生活もより良くなるのでは」というご提案を、具体例と共に挙げられました。

## ●「パパの育休」

続いて、男性の育児休業の現状について吉田さんから解説があり、女性の8~9割が育休を取得しているが、男性は7.48%と大きく差があることが分かりました。一方で、男性の6割は育休についてのアンケートで「是非取得したい」「どちらかといえば取得したい」と回答しており、吉田さんからは「まず取りたいと思っている人が確実に取れる状況にもっていかなければ」というご意見がありました。

また、本来法律では労働者すべてに育休の権利があるにも関わらず（そして日本は他の先進国と比べても取得できる育休期間が長いにも関わらず）、会社側の問題で「育休がない」あるいは「育休は取れない」と思っている人が多いということも明らかに。制度として充実しているにも関わらず、取れていないという実態がよく分かりました。

これに対し天野さんから「『育休』という言葉が『休み』みたいで、それを取るのが申し訳ない、あるいは取ったらずるい、みたいな意識がある」という指摘と共に、「『子育ては女性がするものだ』という意識が女性にも男性にも潜んでいることが、その制度を通じて見えてくるような気がする」というご意見が。

そこで、当時の所属企業の中で男性社員初の育休を取られたという中村さんのお話を伺うことになりました。

【中村さん】

「育休に入る以前にも、保育園のお迎えや、熱を出した時にお迎えに行って通院などもやっていた」という中村さんは、マイノリティで周囲からは浮いていたそう。男性社員の9割は子育て経験がなく、「分からない」「知らない」ことが多いと気づいた中村さんは、「子供はすぐに熱を出す」ことや、「熱が下がっても2、3日は（ぶり返すこともあり）休む可能性がある」ことなど、子育ての実情を自ら発信。それを繰り返すうちに、「そういう人だ」と認知されていったそう。しかしその中で、育休取得時に上司から「さすがに、半年いなくなると君がいなくても仕事は回るし、戻ってきてからどうするつもりなの？」といった内容のことを言われ衝撃を受けたそうです。

最終的には背中を押してもらったそうですが、未経験なことに対する人間の想像力には限界があると悟った中村さんは、「これまで経験してこなかった世代の考えを変えようと労力を払うのではなく、自分たちから、前例にとらわれないで軽やかに変わっていけばいいんじゃないか」と、考え方が変化。

「他人の考えを変えることはできず、できることは自分が行動することだけ。自分のアクションや発言が空気を入れ替える一つの行動、前例、実績になっていく」というお話とともに、会社の中で、慣例に縛られて育休が取れない、育休に対して否定的なことを言われるなど苦境に立たされているパパに対しては、「あなたの行動は組織のためになっているので、是非自信を持って前例になっていただきたい」というエールを贈られました。

また、実際に育児の現場における「パパ」の意識として、「最低2~3カ月は育休を取って、その期間は自分が全部フルコミットするんだ、という覚悟が必要」というお話に。

『ミルクの温度が分からない』『予防接種が分からない』から、『妻お願い』というマインドではなく、覚悟を決めて全部自分でやることで、「育休が明けても当事者意識ができる。そうすると子育ての『サポーター』や『協力者』ではなくて、自分の頭で考える『プレーヤー』になれる」という、実体験を踏まえてのアドバイスがありました。

子育てに対するパパの意識に対して、現役ママの和田さんからは「育休を取っても何をしていたか分からない人は、ただ家に居るだけだったら、会社に行って稼いできてくれない？」という鋭いご意見が。その一方で、「主体者であろうとするパパに対して、ママが機会を奪ってしまっているところもある」という振り返りをされていました。

それを受けて吉田さんからも、「最初は教えなければならぬことや面倒くさいことが多くても、それを繰り返していく中で、結果的にママが物理的にも精神的にも解放されていけるのでは」というお話がありました。

和田さんも、「母になると、母でいることが自分のアイデンティティみたいになってしまう」という気持ちを吐露。自分が本当にやりたかったことを少しずつ取り戻す中で、「母」としてだけではなく、「一人の社会人というか大人」としての姿を子供たちに見せられることになり、結果としてそれが、「なんか、大人になるって楽しそうだな」「世の中って面白いことがいっぱいあるんだ

な」と子供たちにも良い影響を与えることができるとお話されていました。

### ●「夫をやる気にさせる一言」

続いて事前アンケートでご質問の多かった「目の前にある家事も、泣いている子供がいても、育児もしない夫をやる気にさせる一言は何でしょうか？ コツはありますか？」という内容についてディスカッションが行われました。

#### 【中村さん】

『楽しいんだよ』、『こんなにいいことがあるんだよ』と、経験した人が発信することで、家事・育児・子供の成長に関わらないことが、逆に『勿体ない』という価値観がある程度浸透していくという中村さん。

妻が、1日24時間という平等な時間の中で家事・育児のために自分の時間を犠牲にしているのに対して、あなたは何を犠牲にしているのかと質問してみると、夫は冷静になって振り返るきっかけになるかもしれない、という提案もされていました。

#### 【和田さん】

溜まってしまった洗濯物に落ち込んでいた和田さん。そんな時夫から言われた一言、「大丈夫、大丈夫、うちの実家はこの3倍ぐらいあったから！」というのがきっかけで、「この人はこの状況を気にしていないし、自分を責める必要はない」ということに気づいたそうです。お互い苦手なところは、いっそやらないことや、外注してしまうという諦めも大事、というアドバイスが。

中村さんも、お互いのアンテナがどこに立つかのすり合わせと、「我が家ではこれが一番大事」ということを最初に話して共有しておくことが重要だと共感されていました。

#### 【小林さん】

小林さんからは、「長所を探してあげる」というご提案が。子供の指導とも似ているけれど、その人の得意なところを任せて、成功体験を増やしていくことが大切なのではないか、というご意見を挙げられました。

#### 【天野さん】

ここまでのお話を踏まえ、天野さんから、「相手に指示する言葉を使ったり、褒めてやらせたりしていると、言われた側はずっと『やらされている』という感覚が抜けず、何度言っても自発的にやれるようにならない」というご指摘が。また、「本人のやるべきことだと分かってもらう」ための、コミュニケーションの3ステップについて、ご紹介がありました。

##### ○ステップ1

まず相手がやっていることを認める言葉をかける

##### ○ステップ2

目的を一緒に共有する

##### ○ステップ3

「そのために私はこうやって頑張りたいと思っているけれど、達成するためにはどうしたらいいんだろうね?」と、相談する

【吉田さん】

また、「自分を許せるポイントをいかに作っておくか」という吉田さんからは、シングルファーザーとしての視点から、「家事は、毎日生きていると常に降ってくるので、その1つ1つに自分なりの楽しむポイントを作っておくといい」というご提案が。「一人一人、それぞれの楽しみ方、気持ちを上げるポイントを持っておくことが大事」というお話をいただきました。

それぞれの立場からのご意見や分析、歩み寄りから生まれた熱いディスカッションは、冷めやらぬ余韻を残し終了となりました。

### ●パネリスト提言「私達にとっての新しい日常とは」

【小林さん】〈見留愛（みとめあい）〉

【中村さん】〈呪縛を解くための挑戦（チャンス）〉

【和田さん】〈人は人。自分は自分。でも！何事も、自分事。〉

【吉田さん】〈今からできる半歩 明日からできる一歩〉

【天野さん】〈Let's で伝えよう〉

